

の貧困や犯罪というイメージと連動させた解釈が中心であった。他方、ナショナルな言説では、メキシコ文化やアステカ文化、具体的には近年、世界無形文化遺産としてユネスコに登録された「死者の日」や、アステカ文明の「死の神」との関係を示唆する主張が確認できた。カトリックとの関係については、ローカルな主張においてそれらの関係が否定されていたのに対し、ナショナルな言説においては肯定的に、グローバルな言説では、結びつきに関する主張に多様性が存在していた。信仰年数に関しては長い信者ほどよりローカルな主張と結びついていた。今後はそれらの言説が生じる背景をさらに精査していきたい。

### 日本仏教のアメリカ化の諸相

——加州の浄土真宗と禅宗を比較して——

釋氏 真澄

日本仏教の北米伝道の現場では、「アメリカ化(アメリカ人に定着すること)」という課題に直面しており、それは発表者自身がカナダ開教使として経験をしたことでもある。浄土真宗本願寺派(以下、真宗)北米開教区の創設は、一八九九年サンフランシスコでの日系移民向けの寺院創設に遡る。真宗の特徴は、日本文化との強い結びつきと、家族で参加できる寺院形態である。曹洞宗のアメリカ伝道もまた日系移民に応じる形で、一九二二年ロサンゼルスでの創設に遡る。曹洞宗のアメリカ伝道には二つの流れがある。一つは開教当初からの「日系寺院」であり、もう一つは欧州系仏教徒を中心とした「禅センター」

である。一九五〇年代の禅ブームを経て、六〇年代には日本人指導者が禅センターを設立し、全米に広まった。本稿では、アメリカ合衆国カリフォルニア州の真宗と曹洞宗における、アメリカ化の諸相(教学・行・儀礼・伝道方法・僧侶育成)に関するアンケート調査を行った結果を提示・考察する。調査対象は国際伝道に携わる真宗僧侶四名(日本人一名・日系三世米人二名・欧州系米人一名)、曹洞宗僧侶三名(日本人二名・欧州系米人一名)を無作為に人選し、いくつかのテーマにより自由回答を求めた。以下に回答をまとめる。

・教学のアメリカ化 【真宗】キリスト教との差別化の結果、禅や通仏教から非二元論的な表現を使用し、浄土教的表現からの乖離がある。また教学解説の英訳不足と真宗用語の英訳の難しさという問題も挙げられた。【曹洞宗】アメリカ化された教学が、本来の曹洞宗の「言葉から離れる」というあり方とズレを生じる問題がある。

・行のアメリカ化 【真宗】行為の重要性が問われるアメリカで、真宗では自己の行為はさとりには役に立たず、ただ阿弥陀仏にゆだねることで救われると説くので、馴染まない部分がある。「坐禅」を取り入れ人を集めようという動きがある。【曹洞宗】アメリカで坐禅が急速に普及していく中、行の目的が悟りではなく身心の健康維持やストレスへの対処という目的が見られる。

・儀礼のアメリカ化 【真宗】簡略化と英語化が進んでいるが、儀礼の意味解説を行い、アメリカ独自の儀礼を構築すべきである。【曹洞宗】簡略化と英語化が進んでいる。僧侶が儀礼本来

の意義を探求し、アメリカに合った在家も参加できる儀礼を創造すべきである。

・伝道方法のアメリカ化 【真宗】ディスカッション式の伝道が求められている。またウェブサイトや勉強会を持つことは必要不可欠である。【曹洞宗】アメリカ人は平等性を求める反面、カリスマ性のある強い指導力を持った老師を求めている。在家者への坐禅を通じた伝道を中心とし、説明を多くしていかねばならない。

・僧侶育成のアメリカ化 【真宗】将来英語だけで、日本で修学することと同等のものが獲られるように、指導者の育成と教書書の翻訳が望まれている。【曹洞宗】大勢のアメリカ人僧侶を抱えており、日本の組織との制度の整合性の構築が大きな課題である。

今回のアンケート対象者は七名と少数であったが、これらの資料で一応の傾向を考察した。今後資料収集と現地僧侶へのさらなるインタビューとアンケートを実施し、多種多様な角度からの調査を進める予定である。今回は真宗と曹洞宗が、アメリカで直面している課題を示したが、真宗で最も注目すべきは教の非二元化と「坐禅」を取り入れるか否かという課題で、曹洞宗では欧州系中心の「禅センター&非登録団体」と日本の曹洞宗の関係を課題と考察する。共通の課題は、無我を説く仏教を、我を尊重するアメリカで、その本質を伝えられるかという挑戦である。またいずれは日本とアメリカ間で、本山・制度というものは別れていくかもしれないが、教学に関しては対話を続けるべきであると考える。

## 第七部会

### 宗教的観点からの森林の思想と価値

神守 昇一

二一世紀は環境問題解決のために世界中で対策が考えられている。日本の統計局の調査結果では、先進国と呼ばれる国々では人工林が多く、逆に発展途上国と呼ばれる国々では自然林が多い傾向であるが、その中でも日本は人工林、自然林の陸地に対する面積の割合が共に高いという世界でも珍しい国である。これは、気候、風土が植物の生育に適しているという点以外にも日本の文化、思想が大きな影響を与えているためであると考えられる。そのために自然を畏敬するという考えを持つ日本固有の神道に世界的な注目が集まっている。日本人は山川草木など様々なものに神の存在を見出してきた。その考えは若林強齋の『神道大意』などにおいて見出すことができる。

普段多くの神は山や森林に鎮座されていると考えられている。例えば『古事記』、『日本書紀』には、大国主神とともに国作りを行っていた少彦名神が常世の国へ去った時に、大国主神が「私ひとりはどうやってうまくこの国を作ることができようか。どの神が私と一緒によくこの国を作ることができようか。どの神が私と一緒によくこの国を作ろうか」と言うと、海の向こうから光輝いてやってくる神が現れた。その神は大国主神の和魂であり、大和国の東の山の上に祀れば国作りを協力すると言ったために、御諸山に鎮座されたという記述がある。そ